



精神科看護師のアイデンティティに関する研究

看護栄養学部 看護学科
重富 勇 講師

精神科看護師には、精神疾患や心理的困難を抱える人の「その人らしい生活」を支えるため、コミュニケーションを通じた心のケアを行う専門的な技術が必要とされています。患者さんとの信頼関係を重視し、自律性の回復と社会復帰を支援するため、身体科とは異なるアプローチが求められます。その中で対人関係である看護師の基本的態度は、経験値として日常的な実践のなかに組み込まれ、精神科看護師の知恵となり臨床の場で存在していると考えています。そこで、専門性が高い精神科看護師が、どのような信念や価値観（アイデンティティ）をもって実践しているのかを、インタビューを通してまとめました。（図1）

主に明らかになったのは、リフレクティブ（内省的）な看護実践のなかで、当初は看護の不確かさや看護師としての責任感、現状に対する問題や違和感を抱きながら、自分に合った「自分なりの看護」を探して実践を積み重ねていくというプロセスでした。看護師としての「自分の軸」は、「看護

に対する基本的態度」であり、「看護への考え方の根拠」や「行為の意味づけ」について患者さんとの関係性のなかで深められていき、「自分と看護の一体感」は、「専門職としての役割意識」のなかで看護を後輩へ伝えることにつながっていきました。このような過程を経て、精神科看護師の魅力へとつながっていきました。そして、周りに受け入れられるための専門職業能力とパーソナリティ（人間性）が必要であり、自分を組織の中で活用する力、さらに自分らしさをもって周囲に適応していく力も求められました。また、「自分の価値を見いだすこと」や「看護師の誇りを持ち続けること」も重要でした。

この研究を通し精神科看護師は、専門職としてのアイデンティティを自分なりに模索することにより、「自分を活かす主体性」や「看護師としての成長」を身につけていることがわかりました。専門職の知識や技術のみでなく、実践知としてこれから調査を進めていきたいと思えます。



図1. 精神科看護師のアイデンティティ形成

日本ヒューマンケア心理学会学術集会第23回大会発表から一部修正